



3回
シリーズ

家族と農業経営

最終回 一家族経営協定が見失っているものー

家族経営協定が前提とする女性像は、あまりにも画一的でつまらないが、じつは現実のおかーちゃんたちの方が、ずっと先をいっていたりする。それでも普及活動が止まないのはなぜか？千葉県で“普及員の親玉”として活躍された、坂口和彦さんと考えよう。

三好 かやの

●協定なんてつまらない

なぜ農家にばかり家族経営協定が必要なのか？自分自身のそこそこ6～7年の取材経験と、出会った50人前後の女性たちの話を総合すると、「経営内容について話しあつたり、夫婦や親子間で取り決めをするのはおおいに結構。でもそれについて行政が口を出したり、協定書にハンコを並べたり、わざわざ調印式まで開くのは、余計なお世話じゃなかろうか？」システムとしての家族経営協定は、なんかヘンだぞ」という結論に至った。

しかし、日本農業新聞では「家族協定はすばらしい」「協定万歳」の論調が主流。農家の人たちからも「そんなもんいらない」という声がちつとも聞こえてこない。私の認識不足か？もっと長い時間、たくさん

●農家の女性のあり方は 50年で急展開

の農家の人たちと直に触れ合ってきた人に話を聞いてみよう——。千葉県東金市の山武支庁に、坂口和彦さんを訪ねた。

開口一番、
「基本的に私は、家族で協定をむすぶのは、つまらないことだと思っています」

「おお！役所にこういう人もいるんだ。はるばる会いに来た甲斐があつた。

坂口さんは、長らく農業改良普及員として農家を訪ね歩いた後、「普及員の親玉」

として指導に当たり、現在は山武支庁長を務めている人だ。穏やかな話しぶりの中に、役人らしからぬ鋭い見識と分析が伺える。

坂口さんによれば、昭和36年の農業基本法施行以降、後継者対策の切り札として「親子農業協定」が推奨されるようになっ

た。それまでの穀物主体の栽培から、野菜、畜産中心の「儲かる農業」へと、国全体が

転換を図る際、親と子の経営を分離して、子どもたちの経営に後継者育成資金、農業改良資金などを投じてバックアップを図つた。この流れは現実的には成功したけれど、父子協定そのものは実状に馴染まず、定着には至らなかつたという。

「役所では、上からの命令で事業が決められます。真面目な人ほど一生懸命取り組むので、ミスマッチが起こつてしまふ。たまたまに『そんなことができねえ』という人がいてもいひんですが、『普及員の風上』にも置けねえ」といわれてしまう。それが組織のツライところです」

「結婚したら専業主婦になりたい人にはオススメしないけど、自然の中で子どもを産んで育てて、仕事も一生続けていきたい。そんな欲張りな女人には、農業がぴったりだと思う」北海キヤロットさん

「知力、体力、そして家族や地域の人たち

事業がスタートした時点では、農家には上水道の整備、回虫の撲滅、かまどの改善など目に見える形で改良すべきところが多々あり、普及員も農家の人たちも一体となつて邁進していた。

「公衆衛生の概念とか、手作業から機械化へとか、新しいものを持ち込んでとにかくうまくやつていく性格のよさ。この3拍子そろわないと、やつていけない」「白滝ハム子さん」

「農家もどんどん減りづけて、残っているのは、仕事として農業を選び取った精銳ばかり。いまどき役所に助けてもらおうな

してきた今、同じやり方で事業を展開しようとするのは、『押し付け』でしかありません」

坂口さんによれば、○○推進事業、○○活性化事業といった政策が、やたら増えてきた昭和50年代から、かつての普及事業熱は鎮まり「小さな親切、余計なお世話」の感が強くなってきたという。

私が農家を訪ね歩くようになったのは95年だから、生活面における改善事業は、とつぶく終わりを告げていた。残されていたのは「加工所・直売所の立ち上げ」と「家族経営協定」だったのです。その背景には、いまだに「農家の女性は虐待された存在」であるという先入観が漂つている。しかし、私の目の前に現れたのは、自信と誇りをもつて家業に打ち込む、ワーキングウーマンだった。

んて氣弱な人はいない」[長野出耕子さん]

農業は、今や欲張りで優秀な女の人が、一生かけてやる仕事なのである。どこが唐げられているのだろう? このギャップは何なんだ?

●勝手口は古臭いのか カツコイイのか

農家に取材にいってお宅に上がりうるとすると、奥さんは勝手口に姿を消す。私がのこのこついで行くと、「ああ、ダメ。三好さんはお客様だから、玄関から入つてね」といわれ、よく戸惑つた。これを「嫁は家の正面から入つてはいけないとする、前近代的な風習」とする見方もある。

私が住んでいるマンションには玄関はひとつしかない。自分専用の出入り口があるなんて、カッコよくて贅沢だ。都市と農村の文化が違うだけで、勝手口には美学がある。決して「遅れている」わけじゃない。

●型にはまつた女性像が見落としている「見えない力」

◆労働報酬の分配——月給制、年俸制などが推奨されているが、中には「財布はひとつでOK」という人もいる。必ずしも自分の名義に固執しない。夫のものは私のも、ひとつの財布をどうやってやりくりするかが腕の見せ所……この考え方は、都会の専業主婦も一緒だ。

◆労働時間——毎日の労働時間〇時間、

週休〇日と決めるのは、本来の就業形態に反していないか?

「農繁期は明け方から夜まで働いて、冬になつたらのんびりできるのがいい」「トルコキキョウ子さん」

◆夫婦の役割——経営主、妻、後継者それぞれの役割をはつきり決めるようにとのことだが、「お父さんにいわれた通りにやるだけで、毎日が充実している」人もあれば、「私が先頭に立つてやらないと気がすまない」人もいて、夫婦によってバラバラ。

夫婦や家族のあり方をステレオタイプなモデルケースにはめ込もうとするのは、却つてその家の個性や持ち味を損なう危険はある。

こういう意味のない事業は、いつまで続くのだろう? 「組織が存続する限り、永遠になくならないと思います。数年に一度ふと形を変えて現れますよ」(坂口さん)



坂口和彦さん

ない。

「いかにも民主的といいながら、男女の問題の国家管理が始まっているとしか思えません」(坂口さん)

農家の女性にとつては、協定云々よりも、その根幹を支える、経営そのものの方が切実なのである。

「サツマイモの苗を植えたいけれど、乳飲み子を抱えて、思うように畑へ出られないと。苗は3日ぐらい待つてくれるけど、赤ん坊は10分と待つてくれない。植付けの適期を逃すのではと心配」「知多豆芋保存さん」

「私たちは、田んぼや畠があるから、なかなか遠くへいけません。役立つ情報や実例をどんどん教えてほしい」「埼玉稲子さん」

「個人客をどんなにつかまえても、数千数万円単位の売上げ。なんとか十万単位の売上げを確保できる顧客がほしい」「富山野米代さん」

時代や農家の女性の意識が変わつても、時代に廻す軸の要は、意外にそうした報酬や休日といった目に見える現象だけを切り取つて、その家の経営を判断することには意味がないし、とかく個人主義的な色合いの濃い欧米型のフェミニズムを、農村だけでなく日本の女性に当てはめようとしていると、その人の本質を見失つたり、傷つけてしまうことになりかね

てきているし、そういうタイプの女性は、主張のできる人間に、という教育を受けたしかに戦後生まれの私たちには、自己主張のできる人間に、という教育を受けたしか戻る